

實は四十何箇所まではたゞ奥まつた農村であつた——であつても、このことは調査すべき外部的條件であつて、調査された村の性格を示すものではない。心意生活を理解するには村人の宗教關係を無視することは出来ぬ。又常食物に就いても、村人の生産状態、身分關係を知らずして正しき認識は不可能である。又本調査は一定の採集手帖を基礎として行はれたものである。百の事項が民俗學に於いて重要價値を有することは言ふまでもない。従つて尠くとも手帖に記された項目に就いては検討がなされたものであると信ずる。一方村人の側から考へれば、質問される事象に關しては反省の機會を與へられたことになり、事實の有無、又その變遷の過程が意識されるのは極めて自然である。記憶の内容が絶對的な眞實であり、變遷の全體であるとは必ずしも認定し得ないとしても、存在しない、或ひは減じたと云ふが如き歴史的展開の過程は重要な問題を含んでゐる。この點に關して本書が報告すること少いのは甚だ遺憾に堪へないところである。最後に資料整理の方法に就いてあるが、こゝでは資料は論理を壓倒してゐる。本書に見られる分類は先に示された民間傳承論、もしくは郷土生活の研究法の持つ資料整理分類の方法の如く組織的ではない。一に平面的な採集手帖の設問に依據してその解答の如き體裁を有してゐる。併しながら手帖は要するに資料探求の便宜を目的としてゐて、それが直ちに民俗學の體系を示すものとは考へられない、資料に對して餘りにも謙讓であり過ぎた嫌があると云へよう。

かく云へばとて、本報告書に記録された資料の價値は絶大なものであつて、安價な憐愍と無智な輕視との裡にあつて、一村に三週間づ、僻處山村に起居して、この未だ職業化せざる學問に對して捧げられた木曜會同人の純粹な熱情と僅少の時間にかゝる精密な調査を遂げた力倆とに對して全服的な敬意を表し、併せて今後のかはらざる指導と協力とを冀ふ次第である。(菊判、五六二頁、一・九〇、民間傳承の會發行(平山))

○鈴木春山兵學全集

佐藤堅司編

本全集は幕末、三河田原藩にありて、渡邊華山、伊藤鳳山と共に三山と稱せられた、鈴木春山の西洋兵學の翻譯書「兵學小識」「三兵活法」「海上攻守略説」の三つを收めて居る。

春山、名は強、字を自強、號を童浦と云つた。春山は其の通稱で、享和元年、田原に生る。家は父祖以來醫を以て、田原藩主、三宅氏に仕へた。而して、春山又醫を學び、後前後二回長崎に遊び、醫學及び蘭學を學び後江戸に出で、西洋兵書の翻譯に力を盡したもので弘化三年四十六歳にて、江戸に歿した。

序に依れば本全集編纂に付いては、春山の孫鈴木菊子刀自の懇望に依り、昭和九年秋より佐藤堅司氏が編纂に當られたのであつて、爾來二年有半の期間、不撓不屈の精神を以てあらゆる方法を盡し、春山及び其の翻譯書に付研究された結果、本全集には前記三翻譯書の他に卷初に、鈴木家略系圖・鈴木春山年譜

並參考年表、鈴木春山先生小傳、江戸時代兵學史上における鈴木春山、及び補遺が載せられ本全集の理解に役立つて居る。

「兵學小識」は本全集上巻の大部分及び中巻全部を占めて居る物にて、惣引一卷、初篇七卷、二篇七卷、三篇九卷、四篇七卷、五篇七卷、六篇七卷の計四十五卷である。是の兵學小識は一つの原書を翻譯したものでなく、當時の西洋兵學書の多數の物を翻譯し春山により一つの體系の下に編纂された物であるが、後に記する三兵活法が是の中に採用されて居る以外原書に付いては明瞭にする事は出来なかつた。

本書の構成に就いては、學門部と術門部の二門に大別し、學門部にあつては六科に分ち、術門部三科とせるも未脱稿及び譯業未竣の物があるが大體次の如きものである。

兵學小識目錄。

學門部 六科

第一科 養兵學 卷一

第二科 練兵學 卷一

第三科 製器學 卷二—卷十一

第四科 營城學 卷十一—卷十四

第五科 檢地學 繁雜、數學的なる物などあり、術門部の

第六科 修路法 後に讓る(未着手)

術門部 三科

第一科 戰鬪術 卷一—卷三十

第二科 攻守術 (此編未定稿)

第三科 用兵術 (此編譯業未竣)

となつて居る。而して學門部にありては製器學に重點が置かれ特に礮類即ち大砲類、及び銃類、砲彈及び火藥等の製法及び操作が取扱はれて居る。術門部にあつては戰鬪中、歩兵、騎兵、礮兵の各戰鬪及び三兵併合之部、行軍之部、接戰之部等を收めて居る。

而して本全集にあつては士官學校本、山田家本、陸軍文庫本を底本とし、田原本及び高野長英譯「三兵容古知幾」を參考として居る。

「三兵活法」はドイツ人、ハインリッヒ・フォン・ブランド (Heinrich von Brandt) の原著 Grundzüge der Taktik der drei Waffen, Infanterie, Kavallerie, Artillerie, 1833. をオランダ人イ・イ・ファン・ミユルケン (J. J. van Mulken) が一八三七年に翻譯したものから春山が更に重譯したもので、春山没年弘化三年頃には略譯となつて居たらしい。後安政四年に門人藤井靜と箕作玉海(省吾)とが協力して校正し、木村德基の重校とその師中井乾齊の閲を経て、江戸の書肆須原屋から木版本として、卷一から卷五迄出版された。其の後編者の努力により、故大槻如電氏所藏の寫本卷一より卷十迄を發見、卷六以下をも収録する事とし、卷五迄は木版本を底本として大槻本を參考とし、卷六以下卷十迄は大槻本を採用した。而して本書は木版本及び大槻本も共に内容分類の餘りにも錯雜せるものあるを以て多少の變更を加へた由である。而して高野長英譯「三兵容古知幾」と

内容を一にせるもので、歩兵、騎兵、砲兵、及び陣形學、運動學、戰法學、及び歩兵、騎兵、砲兵の戰法を取扱つて居る。

「海上攻守略説」四卷此の中卷一卷二は、海上砲術全書(安政元年刊)の卷二十七、二十八に當るもので、蘭人莫爾甸の著、イドラアト・ベイ・ヘット・ランデルリクト・イン・デ・ゼアルテルレリイ」のある部分の翻譯であつて、海岸攻守の事を取扱ひ、卷三、四は其の原書未詳であるが、營壘造法其の種類等が取扱はれてゐる。本書の見出し極めて不完全の爲、編者が増補を加へた爲、若干舊卷と面目を異したのも止むを得まい。(菊判、上卷、約五〇〇頁、寫眞版一四、附圖六〇。中卷、約七〇〇頁、寫眞版四、附圖二、下卷、約四三〇頁、寫眞版八、附圖三八、東京、八敎會發行、非賣品)(田中)

○日英交通史之研究

武藤長藏著

「吾々が何等かの課題に就き探究せんとする時、先づ爲さねばならぬ事は、其に關し論究せる書籍には如何なるものがあるかを知る事である」。

昭和三年十一月御大典記念號として、長崎高商研究館年報「商業と經濟」の第九年第一冊に、日英交通史料(一)を初めて掲載されてより十年の永きに亙り、其豊かなる語學の智識を充分に活用、日英交通史の研究に専念せられて今茲に、其間の業績を更めて「日英交通史之研究」として世に問ひ、且後學の吾等を

教示せんとした著者の一貫して變らざる研究の態度は著者がサミュエル・ジョンソンの言葉として引用されたる上記の語に盡きる。されば、第一編日英交通史概観、第二編日英交通史料、第三編日英交通史の重要文獻、第四編舊(倫敦)東印度會社と我國との交通貿易再論の五編を以て構成せられたる、實に八百頁に垂んとする本書の大半は、日英交通史一特に初期の—に關聯する凡ゆる史料並に著書の紹介と解題に依て占められてゐる。私は凡そ日英交通史、殊に初期の其に關する物は、其關聯の緊密と價値の如何を問はず、能ふる限りに於て殆んど凡て収録せられ、而も一々冷徹なる精讀による解題に對する著者の絶大なる努力に對し、先づ敬意を表さざるを得ない。一見文字通りの概観に見ゆるかの如き第一編日英交通史概観も、其が他四編、就中第二編日英交通史料に紹介せられたる豊富な史料を基礎としたる概観であり、從つて著者多年に亙る研鑽の結果の精粹であるを知る時、兎角僅少貧弱なる史料を得て早急、直ちに何等かの説を唱へんとし易き非才等に對する好き戒めと謂はねばならない。然し乍ら、淺學の身を以て僭越を敢てする事が赦されるならば、私が本書に依て幾多の教示を受けたる後抱きたるものは、本書が唯一の課題の下に著書として纏められたとは謂へ、其は要するに著者が從來發表せられし業績の再録—素より再録其物ではないが—に留つて、其處には整然として均衡を保てる論理體系をや、缺きはすまいかと謂ふ危懼である。秩序の缺除に就